「安全な歩き方」 ~OODAループで考えよう~

1. **学年・組** 2年南組 33名

2. 目指す子供の姿

友達と交流する価値を見出し、学級全体で自己肯定感と自己有用感を高めながら積極的に自分 の意見や考えを発信して更新しようとする子供

3. 本時における「子供とつくる学び」 4. 「子供とつくる学び」を実現するための手立て

子供と学びをつくるための本単元における課題 は大きく2つあると考える。

まず1つは、「わかっているけどできない」から「わかっているからできる」という行動変容のハードルの高さである。「2列になって歩きなさい」や「車道から離れて歩きなさい」など、子供は学校で指導された歩き方のルールを知っている。しかし、登下校において、子供がルールを守ることができていない実態がしばしば見受けられる。安全な歩き方を守ろうとする行動変容を促すためには、「なぜルールを守らなければならないのか」と「ルールを守るためにどうしたらよいのか」を子供が納得した上で正しく理解する必要がある。子供が「これなら守れる・守りたい」と思えるように、教師と子供が一緒に考えていく学びの営みを「子供とつくる学び」だと考える。

もう1つが、子供は大人よりも視野が狭く、経験も不足しているからこそ、周囲からの情報をより意識的に得なければならないことである。何気なく「見る」のではなく、意識して「みる」ことができるようになることで、より安全な歩き方につながると考える。なお、ここでいう「みる」とは、「観る」という意味が大きいが、それだけではない。視覚以外にも聴覚や嗅覚などもフル稼働させて周囲からの情報や状況を汲み取るために注意深く観察することを「みる」としている。

本時で「子供とつくる学び」を実現 するために、2つの手立てを挙げる。

1つ目は、「指差呼称」という「みる」ことの重要性が非常にわかりやすい資料を用意することである。「安全な歩き方」とは何かを子供は前時までに学習している。本時では、そこからもう1歩踏みこんで「みる」ことに特化して授業を行う。「みる」と「見る」の違いを考えやすくすることで、子供たちが、「みる」ことの重要性をつかみやすくする。

2つ目は、自分事として考えられるように、あえて一度実践が難しいことを提案することである。登下校中に「みる」ことを実践するにはどうすればいいのかを考える際、「指差呼称」という日常で実際に行うことが難しいものを行うように促すと、子供は「できない」と正直に思うだみのようにしたらよいか」と問うことで、初めて「自分事」となる。指導されたルールを守らせるだけでなく、自分でできることを考えることが、行動変容を促す上で大切である。

5. 教材について

本単元では、歩行者の立場から安全な歩き方について理解を深めていく。本校の子供の登下校の様子は広がって歩いたり、おしゃべりに夢中になって周りをよく見ないで歩いたりする姿がよく見られる。粘り強く指導するものの、なかなか行動変容にはつながらない。とはいえ、歩行中の事故による年齢別の死傷者数では6歳から8歳、つまり低学年の子供が非常に多いことから、中・長期的な行動変容を期待する一方で、短期的な行動変容も促す必要がある。

また、安全教育は常に予想不可能な場面に遭遇することを想定しなければならない。学校で学んだ状況に出あうわけではないからである。だからこそ、臨機応変に行動する必要があるのだが、臨機応変に行動しましょうと指導するだけでは、子供たちの行動変容は期待できない。。そこで、「OODAループ」(ウーダループ)という、近年注目される意思決定スキルを安全科で身に付けることを提案したい。OODAループは、「柔軟に対応し、的確に即断即決・実行するためのフレームワーク」であり、PDCAサイクルとは大きく異なる。PDCAサイクルのような業務改善目的ではなく、はっきりとした工程のない物事に対して、刻一刻と変化していく状況のなかでベストな判断を下し、すぐに行動に移すことを目的としている。「OODAループ」とは、「O:Observe(見る)」「O:Orient(わかる)」「D:Decide(きめる)」「A:Act(うごく)」の4つを指すが、これは一般的な意思決定の思考の流れと基本的には同じである。しかし、「OODAループ」は、その思考を意識化する点が異なる。想定外の事態でも瞬時に判断して行動できることを目的とするところは、安全科との親和性が高いといえるだろう。ただし、本単元では、「OODAループ」という用語などを教えるのではなく、低学年では「みる」重要性を理解することを目標とする。

6. 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
安全に歩くために必要なルー	安全な歩き方を実践する上	駅から学校までの道中から、
ルを正しく理解している。	で、「みる」ことを意識するた	危険な場所を探している。
	めにはどうすればよいか考	「みる」ことを意識すること
	えている。	で、安全な歩き方を実践しよ
		うとしている。

7. 単元計画

次	時	内容	
	1	駅から学校までの道を歩き、歩いているときに危険なところを探す。	
1	2	2 見つけた危険なところから、安全な歩き方とは何か考える。	
	3	「みる」ことを意識して、より安全に歩く方法を考える。★本時	

8. 本時の目標

「みる」ことを意識するために、どうすればよいか考えることができる。【思考・判断・表現】

9. 本時の展開

児童の学習活動

- 1. 駅員さんの「指差呼称」の様子を動画で見て、何をしているのかを考える。
 - ・毎回指をさして見ているね。
 - ・声も出して、安全の確認をしているよ。
- 2. 資料から、「指差呼称」は工事現場や医療現場などで も行われていることを知り、なぜこのようなことを しているのかを考える。
 - ・命の危険があるようなところでは、間違いがゆるされないからだと思う。
 - 確認したいところをしっかりと「みる」ため。
- 3.「見る」と「みる」の違いについて考える。
 - 「見る」は見えているだけだけど、「みる」は細かい ところまで見ることだと思う。
 - ・「みる」は生活科の観察に似ているね。
 - 「見る」は無意識で、「みる」は意識しているところが違う。
- 4. 登下校中に「みる」ことを実践するにはどうすればいいか、学校から駅までの道の写真から考える。
 - ・指差呼称まではできないけど、指差しだけならでき きると思う。
 - ・毎日どこを確認するかを決めておくと、意識して 「みる」ことができるかもしれない。
- 5. 本時の学習を振り返る。
 - ・安全な歩き方をするためには、「みる」ことをもっと 意識しないといけないと思った。
 - ・駅員さんのように、「見る」から「みる」になるよう に心がけたい。

指導上の留意点

電車通学の児童が多いので、指 差呼称をする駅員さんの姿を見 たことがある児童が多いと予想 される。実際にどのようにして いたかを交流していくことで、 「みる」ことに意識を向ける。

児童の発言をまとめていく中で、「みる」ことに関わるものを板書で整理する。それにより、OODAループのO(Observe:観察)の重要性を意識できるようにしたい。

「みる」ことの大切さを「見る」 ことと比較することで、形式的 な「左右を見る」ではなく、意 識して周囲からの情報を集める 大切さに気づけるようにする。

指差呼称を実際にすることを求めるのではなく、子供たち自身が本当に実践できることを考えていくことで、「みる」ことの意識化を促し、行動変容につなげる。

歩き方に限定せず、「みる」ことについて振り返ることで、他の場面でも生かせる汎用性のある。

評価:「みる」ことを意識するために、どうすればよいか考えている。【思考・判断・表現】